

織物の話 (57・10・15)

川島 春雄 (昭9文丙)

プログラム委員からの御依頼は「織物の話」でありました。織物全般ということになりますと、申し上げねばならぬことが沢山ございます。例へば嘗ては日本経済のにない手であった繊維工業は産業基盤の重化学工業化に伴い斜陽化し、特に織物製造——織布部門は中小企業が多く、労働集約型で最も近代化の遅れた部門となり、後進国の追上げもあつて、目下通産省の指導で所謂「構造改善」が行われて居り、其の上対米輸出規制を強いられ、転廃業を余儀なくされているものが多いこと。又原料は絹、毛、綿、麻の天然繊維から化合織の人工繊維が主力となり、製法も織よりは編（ジャージ、ニット）や成型（不織布）が多く用いられ、用途も従来の衣料一辺倒から生産資材、インテリア等と幅広くなり、情報化社会を迎へて、製造工業というよりはファッション・ビジネスとして把握すべきことなど、何れも三高会館のつどいでのお話として適当な話題であります。

然し、私の会社川島織物がやっている仕事の中で、社会的にみても又文化的にみても、最も意義のあるものは綴織であることから、今日は綴織のことをお話ししようと存じます。

グアム島のジャングルで二十八年間独り生活していた旧日本兵、横井さんは、着る物がなくなり、竹で織り機を組立て植物の蔓で布を織り、服にしたと思はれます。「恥ずかしながら……」と言いながら新聞記者のインタビュウに答えた時、サツパリとした草色の上下を着ていました。実に驚くべき事です。横井さんは尾張一宮で洋服屋の小僧をしていたことがあるそうで多少予備知識があつたからでしょうが、よくもやったものと唯々驚かざるを得ません。人類が始めて布を織つた時も此の様な事でなかつたかと思はれます。農耕民族は、植物の纖維（棉）を、狩猟民族は、動物の毛を、紡いで糸とし之を機にかけて布に織る。始めは無地の平織だったでせう。次いで無地ではあきたりなくなつて色を付けたり模様を入れたりしたものと思はれます。この場合、先に糸を染めて模様を織出したものを、先染織物——織物と言ひ、織物を織つて後に色をつけたり模様を染め付けたものを、後染織物——染物と言ひます。この先染織物で模様を織り出す為に最初に考え付くのが綴織の方法であります。

文明の発祥地中央アジア・バビロニアの古蹟からも、エジプトのユプト時代、南米アンデス山中のプレインカ時代、中国の漢時代の遺蹟からも夫々綴織の断片が発見されています。我国に於ても正倉院御物の中に綴織があり、中将姫が織つたと伝えられる当麻寺の根本曼陀羅、空海が持

帰ったと言われる東寺の鍵陀穀糸袈裟等渡来品か我国で製織したものかは兎も角随分古くから綴織物が存在しています。日本で綴織を織ったという記録は江戸中期西陣の人、井筒屋瀬平を最初と致して居ります。

然らば綴織の織り方はどうかと申しますと、経糸の下に絵をはさみ経糸の隙間からみえる絵の輪郭や色分けに従い、数々の色系で恰もぬり絵をするように織り進みます。模様のあるところは織前が一直線になりませんので箴が使えません。指の爪を長く伸ばし鋸歯のように刻んでそれを箴代りに緯糸を掻き寄せ更に櫛で固くつめます。綴織のことを爪掻き綴と呼ぶのはこの故です。このような方法で綴りますので、綴織は機械的な制約が全くありません。どんな模様でも自由に織り出せますし、色も無数に増やせます。厚くも薄くも固くも軟くも自由自在です。

次に綴織でどんなものが造られているかと申しますと、帯・帛紗等の高級呉服と袋物、それに額や屏風に仕立てた装飾品、大きいものでは壁掛や緞帳があります。ヨーロッパでは教会や宮殿の壁面を飾る壁掛に立派なものが沢山ありますが、最近劇場やホールの舞台にかける緞帳に豪華な綴織を使うことが多くなりました。これは日本から始まったものですが、アメリカやヨーロッパにも見られるようになりました。太い糸や厚い金箔銀箔を使い、粗い織り方を致しますと立体感が出ますので評判がよいのです。

従来綴織は精緻な織芸しよくぎとして絵そのまゝを織物にするものとして賞美されたのですが、其の後

絵画の再現ではあきたらず、織物として独自のよさを出して芸術の一つのジャンルとして新しいタペストリーが出てきました。スイスのローザンヌで二年毎に国際的なタペストリーの展覧会が行われていますが、毎会の出展はタペストリー界の傾向を示すものとして強い影響を与えています。我国でも日展第四部の出品を御覧になりますと必ず数点の綴織があり、近年若い作家が増えてきた事は心強い限りです。京都在住の芸術院会員山鹿清華先生はその最高峰であります。

外国の綴織についての状況に若干ふれてみますと、フランスとベルギーの二国です。パリのゴブラン製作所はルイ一四世がベルサイユ宮殿建造に当り必要とした沢山のタペストリーを織らせる為、工人を集めて王室お抱えのゴブラン工場を作りましたものが、革命後政府に引継がれた国立のものであり、又フランス中央部のタペストリー産地オービュッソンにも国立の裝飾美術学校があつて技術養成が行われる等国家の保護が極めて厚い。ベルギーに於ても大同小異であります。これに比し、我が国では民間の綴織業者がどこからも保護を受けず、営々として自己の負担に於て綴織を織り続けていることは是非知つて置いて戴きたいことであります。

それでは最後に、日本の綴織が世界の晴の場所、各国の工芸品に伍して妍びんを競っているところがあることを申上げ、そのスライドを御覧に入れて今日のお話を終らせて頂かうと存じます。

それは、オランダのハーグ、国際司法裁判所の置かれている「平和宮」であります。

一九世紀の末、当時の理想主義的風潮の中で、ロシアのニコライ二世の提唱により一八九九年

と一九〇七年の二度に亘って万国平和會議がハーグに招集され、國際紛争平和的處理條約が作成され、常設仲裁裁判所の規定が設けられました。この裁判所を收容する建物としてオランダ政府が敷地を提供し、アメリカの富豪カーネギーの一五〇万ドルの寄付で、五年の歳月をかけて一九一二年に竣工をみたのがこの平和宮であります。

第一次世界大戰後発足した國際連盟は、一九二一年連盟規約の一部として常設國際司法裁判所規程を制定し、これに基づいて平和宮に常設國際司法裁判所が設置されました。一九三九年、第二次大戰の勃発により機能を停止しましたが、戦後発足した國際連合は國連憲章の中に國際司法裁判所を規定し、國際連盟時代の常設國際司法裁判所を引継ぎました。現在平和宮にある國際司法裁判所がこれであります。

一九〇七年の第二回万国平和會議は各国にこの平和の殿堂への特産物の寄贈を要請しました。これに応じ、各国は競ってその国自慢の美術品、工芸品を以って平和の殿堂の装美に協力しました。例えばスイスは尖塔の時計と鐘を、ノルウェーは車寄せの御影石を、オーストリアはシャンデリア、イギリスは高窓のステンドグラス、フランスは壁画とゴブランを、デンマークは磁器の噴水を、アメリカは女神の像を、トルコは一枚織の絨緞を、中国は七宝の花瓶を、シャムは象牙の置物を等々です。日本政府は平和宮への寄贈美術品として何を以ってするか、外務、農商務、文部の三大臣が協議し、東京美術学校長、商品陳列館長等の意見を徴して、フランスのゴブラン

と相對して平和宮に異彩を添えんものと、京都西陣・川島甚兵衛（川島織物の業祖川島甚兵衛の二代目）の綴織と一決したのであります。

一九〇八年、平和宮二階大会議室壁面を飾る綴織制作の特命を拝した川島甚兵衛は、わが国工芸美術を世界に紹介する絶好の機会として、非常な熱意を以てこれの準備に取掛り、現場に相應しい主題を考案すること数旬、絢爛たる日本の花鳥とし、その道の泰斗・菊池芳文画伯に原図を委嘱、工場内に平和宮二階大会議室と同寸法の部屋を構築して、菊池画伯の草稿を掲げ、構図の適正を期し、数次の試験織を張ってその効果を計る等苦心を重ね、当時約一〇万円の巨費と五年の歳月を費して、営々制作したものです。

縦 4.5メートルに巾 4.8メートルのもの二枚、

縦 4.5メートルに巾 2.7メートルのもの四枚、

縦 0.8メートルに巾 7.5メートルのもの一枚、

縦 0.8メートルに巾 3.3メートルのもの二枚、

合計九枚よりなる雄大な一組で、駘蕩の春景に始まり百花爛漫の初夏に終わっています。

木蓮、桐、藤、櫻、杉、つつじ、銀杏の下に百合、烏扇、芋環草、蒲公英、蕨、熊笹、牡丹、金盞花の花弁を置き、配するに孔雀、雉、燕、雀、豆鳥等からなっております。殊に孔雀が燦然たる金翼を翳し、悠揚として世界の平和を謳っている有様は花の艶麗なると共に眼の眩むばかりで

あります。恐らくこの綴織が平和宮にかけられた大正のはじめ、これだけの日本の美術が世界に紹介された例は恐らくなかったでしょう。そうして文字どおり燦然と輝くこの壁面の前に多くの人々は息をのんだことでしょう。この部屋には、シャム、トルコ、清国等の寄贈によるものが飾られています。一般に「日本の間」と呼ばれており、年間四、五万人の平和宮見物客に対する一番の見せ場となっています。

ではスライドをお見せして終ります。御静聴有難うございました。

(川島織物代表取締役会長)